



Title	<紹介>藤田真一著『蕪村 俳諧遊心』
Author(s)	富田, 志津子
Citation	語文. 2000, 74, p. 50-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68967
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

藤田真一著『蕪村 俳諧遊心』

富田志津子

本書は、長く蕪村を研究してこられた著者の、これまでの研究の集成である。しかし「あとがき」にあるように、既発表の論考は補筆訂正がなされ、また新稿も多く加えられて、まとまりのある一冊となっている。

本書に首尾一貫して示されている姿勢は、蕪村をとりまく環境の中で、つまり京都という地、近世という時代において、蕪村像を把握しようというものである。また、つねに蕪村の作品にたちかえり、そのことばをとらえて蕪村の表現を考察しようとしている。

このように紹介すると難しい研究書が想像されるかもしれない。しかしあがう。たのしく、面白い蕪村論である。専門外の読者であつても、作品のよさを味わい、登場する人物の温もりを感じ取ることができるはずである。

作品論も人物論も、緻密な考証にもとづいた論考なのだが、何がこんなに面白いのかというと、蕪村とその周囲の人々が実に生き生きと描き出されているのである。また、常に作品の深みを示そうとして、一句のよさを鑑賞しようとする姿勢をとっているのである。

蕪村は機知に富んだ手紙を書く人であった。その手紙を読み込むことにより、発せられた状況を解釈しようとするアプローチは新鮮であり、『蕪村書簡集』(岩波文庫)の編者である藤田氏ならではのものである。たとえば、門人百池に宛てた手紙の中で、蕪村は次のように書いている。

今日は家内之者共、紛者のだてにて、しばるへ罷こし、愚老一人、俊寛已來之あはれ御推量可被下候。かゝる時節に、天よりふれかしと願事に候。

妻子が芝居見物に行つてしまい、取り残された自分は俊寛のようだ、いつそ雨でも降つてこい、と天を呪つてゐる蕪村がそこにいる。こうした俳味あふれる書簡が紹介され、蕪村の人柄や、周囲との温かい交流が彷彿としている。

また、蕪村の友人、門人の、これまで知らることのなかつた伝記的事実が多く明らかにされている。京島原に居を構えていた太祇と吉原との関係や亡くした子どものこと、阿波藩士であった大魯の悲運と不肖の門人を見捨てぬ師、蕪村の温情などが解明され、そこでも、それぞれ一人の人間としての面白さが論じられている。

作品論においては、当時流行していた文芸思潮、つまり詠物詩をはじめとする漢詩文の影響を指摘し、漢詩壇との交流に言及し、さらには絵画を前提とする句の解釈も試みている。たとえば蕪村の「かなしさや釣の糸吹あきの風」、几菴の「鮮き魚拾ひけりゆきの中」といふた句が、当時知られていた漢詩や山水画をもつて新しく解釈されており、それは強い説得力をもつて読者に迫つてくる。

蕪村の俳諧に関する実証的な研究は、これまでに多くはない。本書は、蕪村論としても中興俳諧史としても、新しい視野をもち新見解を提示した、研究史上重要な書である。それと同時に、誰にても一読を勧めたい洒脱な、たのしい書でもある。蕪村の絵画と書簡による表紙の装丁からも、著者のセンスがうかがわれよう。(一九九九年七月三十日発行、若草書房、三五三頁、本体価格八八〇〇円)